

---

# ツキハミ虫

藤原建武

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツキハミ虫

### 【Nコード】

N9672W

### 【作者名】

藤原建武

### 【あらすじ】

「ヨルガクル」、謎の言葉を残して平戸省吾は死んだ。平戸に妻を殺された葛城恭次は、その言葉の意味を明らかにしようとする。

そこへフリージャーナリストの斑鳩郁雄が、月前町で起きる怪事件の謎を追って、恭次の前に現れる。

人口二万人の、山間にある月前町。水田や果樹園が広がっていた。恭次は日本農家同業者組合、略して「農同」の調査員だった。農家の家々を訪ね、肥料や農薬の具合を聞いたり、新しいものを紹介したりする。

秋の爽やかな日差しの中、恭次は縁側に腰かけ、老婆の出したお茶をすすっていた。

「どうですか、最近」

隣に座る老婆　大沢は金歯をのぞかせて笑いながら、

「虫もつかなくなつて、大助かりよ」

「それはよかつたです」

「ただね、最近鳥を見なくなつたかしら」

「食べる虫がいなくなつたからじゃないですか？」

「昔は庭木の枝に餌をさしてたら、よく来たんだけどね」

恭次は話半分に、通帳を確認する。

「実は今、新たに四十万以上の預金をしていただくと、農薬の値段を二割引くサービスをやつてるんですよ」

「あら、そうなの」

「今までどおりの年利ですし、いい話だと思つんですけど」

「そうね。最近はガソリン代も高いし、息子夫婦も助かるでしょ」

「ありがとうございます」

農同では農家の資産管理、運用もしている。

「元銀行員ですし、信頼できるわ」

恭次は苦笑する。三年前まで、隣の銀行に勤めていた。二年ほどで、月前町の農同に転職した。給料や待遇から見れば、かなり見劣りする。

大沢はその事情を知っており　というよりも知らない人間の方

が少ない　嘆息をもらす。

「三年前の“あのこと”さえなければねえ」

恭次の表情が引きつった。

「あら、ごめんなさいね。余計なことといって」

「いえ。妻のずっと暮らしてたこの町で、皆さんのお役に立てて、僕は満足しています」

それに大沢は、どう声をかけるべきか戸惑っているようだった。

恭次は立ち上がり、

「それでは失礼します。ごちそうさまでした」

大沢はしわしわの顔に笑顔を浮かべ、

「もしよかったら、孫娘の旦那に欲しいわ」

恭次は苦笑し、

「ありがとうございます。まだ独り身を楽しみたいので」

大沢家を出て、車に乗り込む。今日のうちに、あと五件。長話に付き合うのも仕事なので、訪ねるペースは遅い。

今の仕事もそんなに悪くなかった。

恭次は三年前、挙式の直前に、妻を殺された。犯人は精神鑑定の結果、「責任能力が無い」と無罪になった。その落胆の中、精神病院の施設で、犯人は変死した。衰弱死とも、自殺ともいわれている。ただ犯人は発作を起こすたびに、「ヨルガクル」と叫んでいたらしい。

夜が来る　だが夜に怯えていたわけではない。昼夜がまわらず、発作のたびにそう叫んでいた。

恭次は何度か、その言葉の意味を考えたが、見当もつかなかった。ただその言葉に、妻が殺されなければならなかった、理由を求めたかった。

犯人は妻と同じ、月前町の人間。何か知っている者はいないかと、農同の調査員になり、月前町の人々と親密な関係を築くようになって

た。

三年目にしてやっと分かったことは、犯人の平戸省吾が、奥月村の人間だということだった。

「奥月村は、今は誰も住んでいないが、あそこの連中には、たまに頭のおかしいのが産まれるんだ」

そう老爺は話した。奥月村は二十年前、月前町に合併された。老人世代の間では、奥月村に関する、奇妙な言い伝えがあった。

「近親結婚を繰り返した結果か、頭に問題をもった連中が多いんだ。ただ見た目や、普段の様子からじゃ分からない。急に暴れ出したり、意味の分からないことを叫び出すらしい。最後は自殺するか、人を殺したりするらしい。俺は見たことないがな」

その言い伝えから、奥月村の人間というだけで、忌避の対象となった。しかし戦後の混迷期などに、出稼ぎにきた村人との混血が多く産まれた。誰が村の血筋が分からなくなり、取り立てて話題にする者もいなくなった。

「平戸が奥月村の人間の、子孫だつていう証拠はない。だが素行を聞く限りじゃ、村の人間の気がするんだよな」

「素行、ですか？」

「嫌なことを思い出させて悪いが、事件を起こす直前、ヨルガクル、そう喚いて、暴れていたらしい。まるで何かに怯えるように」

「夜が来る……」

「それが夜のことだとしても、真つ昼間からだ。今じゃ平戸家もどこかに引越して、本当のところを確かめようもないが。一日中、物置から出てこなかったとか、そんな噂を聞いた」

「奥月村の人間は、みんなそうなんですか？」

「全員ではないが、それと同じようなことを、五年前の一家心中事件の犯人も口走っていたらしい」

疑念は確信に変わった。「ヨルガクル」、その不明な言葉に、何らかの意味がある。

地主である父には、真実を知ってどうするつもりかと聞かれたが、

恭次は真相を明らかにすることで、前に向かおうとした。このまま彼女の死を、曖昧にしたいくない。

自己満足でしかないが、そうすることで、気持ちの決着がつく気がした。

斑鳩郁雄はフリージャーナリストの肩書きで、奇怪な事件の謎を追っていた。ジャーナリズムの世界では異端扱いで、その記事を書てくれる奇特な雑誌は一つしかなかった。

かろうじてフリーを名乗れるのは、ときおりその手の依頼が舞い込むからだ。

昨今のテレビは、幽霊や未確認生命体の特番が盛んだ。そこで斑鳩に、その下調べや、番組作りの打診がくる。ネームプレートに「フリージャーナリスト」と書かれ、コメンテーターとしてテレビに出演したこともあった。仕事は順調といえた。

その斑鳩にコンタクトを取ってきた人物がいた。素性は一切明らかでなく、なにか危険な臭いがした。普通なら無視するところだが、その人物から送られた資料に興味を抱いたのと、その人物に興味を持っていたからだ。

待ち合わせ場所は喫茶店だった。やって来た、口髭を生やし、やや三白眼の男は、「佐藤」と名乗った。歳は三十代前半か。日本人と思われるが、長身で彫りが深く、アラブ系の面差しがあった。国籍までもが不明である。

斑鳩はそれほど背は高くないが、長髪にサングラス、野球帽をかぶっていた。三十路前で、細身。この格好でギターでも持てば、ミュージシャンぽく見える、とよくいわれる。

「最初は音楽家と思いましたよ」

佐藤は表情一つ変えずにいう。

「さっそくですが本題に入りましょう。この資料に書かれたことは真実なんですか？」

「はい」

「私は職業柄、幽霊なども調査しますが、いわゆる怨霊などは信じ

ていません。ですが短期間のうちに、二人の人間が、限定された空間で、同様に命を落としたのは事実。しかしそれを、“呪い”と断定することはできません」

「やはり貴方は、私の思ったとおりの人物だ。さすがです。そのとおり、我々は呪いだとは思っていません」

「では？」

「分かりません。五年前、月前町で起きた一家心中事件。正確には父親による一家惨殺。最後は家屋が全焼しています」

「その後、父親は押し入れの中で、膝を抱えた状態で、焼死しているのが発見されたんですね」

「このとき、騒ぎを聞きつけた近隣の住民が、興味深い証言をしています」

「ヤミガキタ」

「そうです」

そこで斑鳩は腕組みした。「ヤミガキタ」、字をあてれば「闇が来た」だろう。しかしそれだけ聞けば、何かの幻覚を見ていたと思えない。

「それは、精神が錯乱してただけじゃないんですか？」

「確かに錯乱していたのでしよう。しかしその二年後に起きた花嫁殺人事件。犯人の平戸は精神鑑定の結果、無罪となり、施設へ収容されましたが、間もなく変死しました」

「そして言い残したのが、ヨルガクル」

「そうです。“先生”はこのことをどう思いますか？」

「うん。おそらく二人とも、闇や夜のことをいつてるのではなく、共通するイメージ、たとえば何か黒いものとか、それに迫られる幻覚を見ていたのだろう」

佐藤は指を鳴らした。

「そのとおり！ しかしそれは何なのか」

「それが呪いだというわけですか？」

「そう考えるしかないのです。この二人は面識がない。ただ」



「同じ、奥月村の子孫」

「そこに鍵があると思っっています」

佐藤はブラックコーヒーを口に運び、格調高く目を閉じる。そして一息おき、

「先生には、この謎を明らかにして欲しいのです」

「依頼とあれば、全力で調査しましょう。しかし何のために？」

「先生ならお分かりでしょう？」

斑鳩は笑う。

「もしこれが、奥月村の子孫の呪いなら、また同じことが起こる。

そしてその子孫がどれだけいるか分からない。もしも一斉に発作を起こしたら、どれだけの規模の混乱が起こるか分からない。ということではないですか？ 佐藤氏」

佐藤は指を鳴らす。

「先生には頭が上がりません。調査の仕方はすべて、先生にお任せします」

「必ず真相を明らかにしましょう」

佐藤は封筒を取り出し、当座の調査費用を渡す。厚みで、百万円以上あることが分かった。斑鳩への厚い信頼が分かる。斑鳩は力強く笑った。

「最後に一つ、分からないことがあります」

「何でしょう？」

「貴方の正体です」

それに佐藤は、口髭の下で笑った。

「それは是非、先生の力で明らかにしてください」

奥月村は二十年前、月前町に合併された。平安時代の記録によれば、もとは一つの郷里だったらしい。古くは月波見郷といった。その後、江戸時代の記録には奥月と月前の名前が出てくるので、その以前に二つに分かれたらしい。

斑鳩は月前町の役場で、奥月地区には誰も住んでいないことを確認する。奥月村の資料は役場に移されていたが、古い文献は県の財団が保管しているらしい。閲覧を申請し、後日にアポイントメントを取った。

「それ以外に、古い資料を保管してある場所はないでしょうか？」  
斑鳩は、文献の調査にきた、研究員を名乗った。名刺には「歴史学調査員」などと、曖昧な肩書きをのせてある。ただ学芸員の資格を持っているので、そこらへんを怪しまれても問題ない。

役場の受付の、中年男性は、

「お寺さんなら、何かあるんじゃないですかね？」

月前町の檀家寺、光鐘寺。開創は江戸時代の寛永期。江戸幕府が寺請制度を完成させた頃だ。

斑鳩は町の中に、ひっそりと佇む寺院を目指した。禅寺で、座禅体験ができる。せつかなので斑鳩は、小一時間座禅させてもらった。その後、住職に、

「お寺の縁起を教えてくださいたいのですが」  
歳のいった老僧は、穏やかに話しはじめた。

奥月村には人の心を惑わす、「鬼虫」という魔物が住んでおり、それを清賢和尚が退治し、光鐘寺を建てた。

「その名残として、一風変わった“鬼やらい”の儀式が伝わっています。おそらく当時の芸能、歌舞伎や能楽と混ざったのでしょう。

“モノツキ”と呼ばれる鬼役を、“モノオトシ”と呼ばれる僧役が

退治する演劇です」

モノツキとは、憑依された者のことを意味するのだろう。モノオトシは、それを“おとす”者。

「その鬼虫というのは、どのような鬼なんでしょう？」

「おそらく、仏法の説話から引いてきたのでしょうか。鬼虫とは人の心に住む、邪悪だとされます」

暗に「物語の域を出ない」と言っているのだ。

「モノツキとは、どのような状態をいうのでしょうか」

「狐憑きの類でしょう。人を疑心暗鬼にさせ、豹変させる、悪霊のようなものです」

「なにか当時を伝える、文献などはないのでしょうか？」

「あいにく、明治の廃仏毀釈によって、寺は焼け落ちてしまい、多くの貴重な文献が失われてしまいました。ただ、その後に描かれたものなんです」

住職は巻物を持ってくる。

「その鬼虫を描いたものです」

それはたくさんの子蜘蛛を抱えた、巨大な蜘蛛の絵だった。おどろおどろしく描かれ、西日本に伝わる妖怪、牛鬼に似た印象を抱いた。描かれたにしても、かなり最近のものではないだろうか。

斑鳩が寺を後にした頃、晩鐘が鳴った。腹に低く染みこむ。

佐藤の話ではないが、“呪い”の説話は長く根付いているようだ。

## Report 03 「ウェンディ」

恭次は二十七歳。妻とは二つ違い。

妻 氷上晶子と出会ったのは偶然だった。車が側溝にはまり、困っている彼女を拾い、家まで送った。その間に意気投合し、都合を見つけては会うようになった。

一年ほど交際し、一緒に住むようになった。晶子はよく弟の自慢をした。その弟の描いた絵が、町の美術館で、大賞を受賞したらしい。

暇を見つけて行こうとした矢先だった。「斑鳩郁雄」という記者から、話を聞きたいと持ちかけられた。どこで調べたのか、電話口で、

「つらいことを思い出させると思いますが、三年前のことで、お聞きしたいことがあるんです」

恭次は、この斑鳩とかいう記者が、自分の知らないことを、知っているかもしれないと期待した。

「大丈夫です。どこでお会いしましょう?」

「実は今、月前町に来ているんです。駅前の喫茶店でよろしいですか?」

「それをお願いします」

そうして実際に、斑鳩に会った。長髪に野球帽、サングラスと不審な出で立ちだった。背は恭次よりも低いだろうか。歳も若い気がした。

「どうも、こんにちは。斑鳩です」

「はじめまして」

挨拶もそうそうに、

「葛城さんは隣の銀行に勤めていましたよね?」

「ええ。妻の住んでいた町が恋しくて、転職しました」

「失礼。軽率な物言いでご不快にしたら申し訳ないのですが。葛城さんは、事件の真相を知るために、月前町に来たのではないですか？」  
恭次の顔が引きつる。

「そうですね。それもあります」

「私は今、この町で起きている、異常な事件について調べているんですよ。五年前に起きた、一家心中事件はご存じですか？」

「はい」

そこで恭次は、斑鳩に期待を寄せるようになった。

「犯人は、“ヤミガキタ”と繰り返していたそうです。そして三年前、葛城さんの奥さん、晶子さんが亡くなられた事件で、犯人の平戸は“ヨルガクル”と言いながら、変死した」

「そうです。そしてその二人とも、奥月村という、二十年前に合併された村の人間だそうです」

「やはり調べていましたか。農同に勤めていますから、なにか詳しく知っているのではと思っただんですよ」

「でも、三年かけて分かったのはそのぐらいです。言葉の意味も分かりません。偶然二人とも、似たような幻覚を見たんじゃないでしょうか」

自分で言っただけで、違ふなと思った。そんな単純でない、何かを感じていた。

斑鳩は口元に手をあて、

「幻覚、といますと？」

「なにか暗いイメージ、それに迫られる幻覚、じゃないでしょうか？」

「ウエンディゴ、という精神病をご存じですか？」

「いいえ」

「これは北部のインディアンに伝わる伝承なのですが。ウエンディゴ自体は悪さをする精霊のことです。問題は、これに取り憑かれた人間です」

「取り憑く、という」と

「日本でいえば狐憑きのようなものかもしれませんが。風土病、あるいは民俗宗教による特有の精神病なのかもしれません。このウエンディゴに取り憑かれた者は、自分がウエンディゴに変身するという、恐怖感に支配されます。そのうち通常の食事をできなくなり、かわりに人間が、食べ物に見えてくるそうです。そして最後には、完全にウエンディゴになる前に自殺するか、人を殺害し、部族の者に処刑されるそうです」

「それと、今回の件が？」

「ウエンディゴ憑きが、一種の精神病だとしたら、たとえば栄養分の不足による幻覚だとしたら、その状況はすべての人種に起こりうるものです。ウエンディゴの場合は、そのイメージが伝承に結びつき、そうなった。今回のそれが、私は“ムシツキ”と呼んでいるのですが、もしそうだとしたら、ウエンディゴが暗いイメージに置き換わっただけなのではないでしょうか」

「そう考えれば、そうなのかもしれませんが……」

にわかには信じられなかった。もし何らかの栄養不足に起因するのなら、もっと起きてもいいのではないだろうか。

「実はこのムシツキは、古くは江戸時代から伝わっているのです。人の心を惑わす、鬼の虫として伝えられています」

「そんな話が……」

「光鐘寺に伝わるものです。あまり知られていないのでしょうか。そして鬼虫は、奥月村に住んでいたとされます。奥月村の人間特有の、何らかの精神病なのでしょう」

「まだ私は、斑鳩さんの話は信じられませんが、だとしてどうするんです？ 記事にするつもりですか？」

なにかもてあそばれている不快感を覚えた。それは急に現れた人物が、恭次の三年間の努力を無駄だと言わんばかりに、その真相を語っているからだった。

「私はただ、真実を明らかにしたいだけです。これはまだ仮説にすぎない。この話を警察や医療機関にしても、相手にされないでしょ

う。私は、ただ曖昧に、この事件を闇に葬りたくないのです」

斑鳩から熱意が伝わってきた。確かにこんな話を記事にしても、誰も相手にしないだろう。功名心ではなく、彼のジャーナリズムがそうさせるのだ。

「ですが、どうやって真実を明らかにするんですか？」

「奥月村の人間に接触し、彼らのイメージの根底にあるものを探り出すんです。しかしそのためには信頼が不可欠。民俗学の調査は、一夕にしてなりません。地道な踏破と、互いの信頼関係が不可欠です」

「民俗学の方なんですか？」

「いえ。私は、サイエンスエンターテイナーです」

斑鳩の話は、それにあたって恭次に協力して欲しいとのことだった。恭次は快諾した。自分のやるうとしていたことと同じであり、力強い味方ができた気がしたからだ。斑鳩なら、真実を明らかにしてくれる気がした。そしてそのために、自分の存在が不可欠だ。たとえ真実を明らかにしても、もう妻はいない。それでも、前に進むため、今自分が生きる気力は、この町にある謎に迫ることだった。

「そういえば、このあと予定があるんじゃないんですか？」

「ああ」

斑鳩の言葉に思い出す。

「たいした用事じゃないんです。美術館に行こうと思っていました。斑鳩の話がたいしたことがなかったら、適当に切り上げて行くつもりだった。そんなふうに使っていたことが申し訳ない。

斑鳩は感心したように、

「ほう、絵がお好きなんですか」

「いえ。実は妻の弟が、描いた絵が入選したんですよ。なんか大賞をとったらいいんです」

「見に行かなくていいんですか？」

「いや、申し訳ないのですが、斑鳩さんの話が一段落したらのもりだったんです。でも、今はそれどころじゃない、と思ひまして」「せっかくなので、一緒に行きましょう。道すがら話すこともできますし」

「いえ、さすがに悪いです」

「お気になさらず。私はこれでも、絵が好きなんですよ。レオナルド・ダ・ヴィンチとか」

「では、申し訳ありませんが」

今日知り合った人物と、弟の絵を見に行くのは奇妙な気分だった。



しかしいろんな人に、妻の弟の絵を見てもらえて嬉しかった。

斑鳩は恭次の車に乗り、美術館に向かう。道中、今後の計画を立てた。斑鳩は町の民宿に泊まっているらしく、しばらく滞在するらしい。恭次は一人暮らしなので、居候をすすめたが、それには及ばないと斑鳩は断った。まだそれほど親しくないのに、それ以上は引きとめなかった。

「私は今度、奥月村の跡地を見てきます。葛城さんは、もし機会があれば、情報を引き出してください」

「分かりました」

とはいったものの、具体的にどうすればいいか、思いつかなかった。

そうこうしているうちに、美術館に着いた。休日だが、客は少なかった。

「ほう、モネの巡回展が来てるんですか」

「みたいです」

入り口の看板に、貼り紙があった。斑鳩が興味を示したが、恭次は構わず、町民の作品が展示されているコーナーに向かう。曲がり道だらけの空間に整然と、百点近い作品が展示されていた。

絵が好きな妻がいればまた違ったのだろうが、恭次は絵の良し悪しは分からないが、どれも素晴らしい作品に見えた。斑鳩は胡散臭い講評をつけている。そして弟 氷上霧也の、作品を見つける。

人間の背丈ぐらいいはあるのかという、縦長のキャンバスに、力強い油絵が描かれていた。それを見て斑鳩もうなる。

「縦断するように描かれたこの人物は、うん、そうだな、確かな存在感があるのに、まるで生命がないかのようだ」

「ですね」

とうなずくしかなかった。白いドレスを着た女性、だろうか。まるで人魚のような佇まい。その美しい顔に見覚えがあったが、かすんだように描かれ、まるで幻のように感じられた。

「これは大作だな。周りを囲んでいるのは花だろうか？ 黒い斑点

に隠されて、まるで虫食いの眼鏡でのぞいているようだ。タイトルは「

「はんしょく」です」

涼やかな声に、斑鳩と恭次は振り返った。そこには微笑を浮かべた、少年がいた。

「霧也くん！」

氷上霧也は、どこか厭世的な笑みを浮かべていた。

「どうしたんだい？ 出歩いてても大丈夫なのかい？」

「ええ。おかげさまで。葛城さんもどうしたんです？」

「君の絵を見に来たんだよ」

「ありがとうございます。そちらの方は？」

どう紹介しようかと思った。斑鳩は晶子の死について調べている。斑鳩にしても、無遠慮に質問しかねない。

そんな不安をよそに、斑鳩は答えず、

「この絵は、何をテーマにしたんだい？」

「さあ、何でしょうかね」

霧也は肩をすくめてみせる。どこか意地の悪い性格をしていた。

斑鳩は思案顔で、

「黒い斑点、“斑蝥”、斑に食いつぶされているのは花だ。これは自然が蝕まれていくさまと、そうして失われていく女神、あるいは何らかの象徴を描いたものじゃないかな」

霧也が驚いたように目を見開く。

「美術関係の方ですか？」

「いや、フリーの記者だよ。葛城さんとは知り合いでね、美術館に行くというからついてきたんだ」

「そうなんですか」

斑鳩は遠慮したのか、恭次と同じように、霧也には聞かなかつた。

霧也はまた、あの笑みを浮かべると、

「自然が芸術を模倣するという、言葉を聞いたことありますか？」

「オスカー・ワイルドだね」

「まあ僕は、誰が言ったのかしらないんですが」

自嘲気味な表情をして、視線を「斑蝕」に向ける。

「もしも自然が芸術を模倣するのなら、人の罪もまた、模倣するのではないでしょうか」

「というと？」

「奪われたように、奪う」

その言葉が、恭次の心臓を刺した気がした。霧也もまた、三年間苦しんだ。それは自分以上だったかもしれない。そして前に進むために、この絵を描いた。だがこの絵の、奪った者と、奪われる者はどこにあるのだろう。

「では僕は、モネの展示を見に来ただけなので、これで帰ります」

「うん。じゃあ、また。気をつけて」

「はい」

霧也は一礼して去っていく。恭次は霧也が、無理に笑っていることに気づいた。自分が目の前にいるだけで、あのことを思い出してしまうのではないだろうか。

恭次が霧也の背中が、曲がり角に消えるのを見守っていると、

「霧也くん、どこか具合が悪いんですか？」

しばしば恭次が気にかけていたのが分かったのだろう。

「実は霧也くん、事件のショックで、一時期失明していたんです」

「そうだったんですか」

「徐々に良くなって、今ではああして、一人で出歩けるようになったみたいです」

「逆境が、彼を成長させたんでしょう。この作品は素晴らしい」

恭次は再び「斑蝕」を見た。この女性像が晶子なら、奪われた者は彼女のことなのだろう。

奥月村の人間といっても、噂程度にしか知らない。もしかしたら無関係な人間の可能性もある。戸籍謄本で確認しようものなら、二万人分の家庭を調べなければならぬ。写しを取るにしても、数百万円はする。斑鳩ならすでにやっていそのだが。

住民票などは、ある程度の手続きを踏めば簡単に見られる。それがもとなる犯罪も起きているので、あまり気分のいいものではない。

そこらへん鑑みれば、恭次による三年間の信頼関係や人脈は、かなり有効だ。それが役に立つのも、斑鳩あつてのもの。斑鳩にしても、恭次の存在は不可欠。

使命感と真実に迫る期待に、恭次は胸を張った。

恭次が最初に足を運んだのは、高野家だった。ビニールハウスの果樹園をやっており、農同からは、スプレータイプの殺虫剤を購入していた。

「こんにちは」

恭次が挨拶すると、気さくな老婆が現れる。

「おや、恭次さん」

「どうです、作柄は」

「今年の桃は、なかなかだよ」

恭次は慣れた調子であがり、客間に案内される。老爺がここにこしながら待っていた。そこで恭次は胸が痛くなった。去年の春から孫娘が行方不明になっていた。この老爺が奥月村の人間だと聞いたが、気丈に振る舞っている姿に、どうにも聞くのが躊躇われた。

「今日は収穫の話できました」

「今年はぎょうさん取れたからね。単価は安くなっちまうだろう」「そうですね」

老爺が遠い目をする。

「瑞希はうちで取れる桃が大好きでな。ビニールハウスだから年中取れるし、飽きもせずよく食ってたもんだよ。たくさん余るだろうし、今年のは特に美味いから、食わせてやりたいな……」

「きつと、無事ですすよ」

老爺は苦笑する。

「去年の春だったかな。絵を描きに行くって言って、出て行ったきりだ。山狩りまでしたんだがな」

「絵が、好きだったんですか？」

「学校の課題だったかな？ いや、高校に上がる時だったから、そんなことはない。誰かと描きに行くって言ってたかな」

「そうだったんですか……」

恭次は言葉に詰まった。どうにも斑鳩の期待には応えられそうにない。

不意に老爺が、

「奥月の人間にはな、奇妙な病気があるんだよ」

「えっ？」

「ああ。今は合併されて、最後の連中ももうこの世にいない。恭次さんは隣町の人間だったな。知らなくても無理ないな」

「いえ」

「そういえば」

そこで老爺は口を閉じた。平戸のことを思い出したのかもしれない。恭次は話を終わらせないうえ、

「その、奇妙な病気とは？」

老爺はどこか気まずそうだった。

「ああ。実は俺は奥月の生まれでな、出稼ぎに来た時、ばあさんと結婚したんだ。その奥月の人間には、たまに奇妙な病気の奴が産まれるんだ。ただ誰がそうなのかは、見た目からじゃ分からない。急にだ。気がふれちゃうんだ。クライとか、ミエナイとかわめいて。目が見えなくなっちゃうんだ。そしてそのうち……」

老爺はそれ以上話す気はないらしかった。そこから、

「だから瑞希も、急に目が見えなくなつて、谷底に落ちちまったのかも知れない……」

「そんな」

「いや、悪い。こんなこと、町の人間には話せなくてな。昔は村の人間つただけで、ずいぶん嫌われたもんだ。恭次さんは町の間人じゃないし、なんとなく話したくなつたんだ」

「いえ。私でお力になれるのなら」

「ありがとうな」

斑鳩はそれを、ムシツキと呼んでいた。もう少し深く触れたかったが、これ以上は躊躇われる。ただ確かに、その奇病は存在するらしい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9672w/>

---

ツキ八三虫

2011年9月26日03時10分発行